

少女金魚

【前編】

作・ももんが

※※ご注意※※

この物語はフィクションです。実在する一切の事物とは関連がありません。

人権侵害その他、法律・公序良俗に反することを推奨する物語ではありません。あくまでも想像・空想のお遊びとしてのみお楽しみください。

内容の性質上、十八歳未満の方の閲覧は禁じます。

以上の事柄を遵守せずに行われたことに対して当方は一切責任を持ちません。

また作中、金魚の品種に触れる箇所がありますが、あくまで創作上の架空の設定であり、実際の金魚の品種に対して優劣を論じるものではありません。

一、金魚鉢

そこは随分前から話しには聞いていた。

いつから存在し、誰がどうやって作ったのか、一切が謎に包まれている娼館なのに、一度訪れれば極楽はここにしかないと思えるようになるのだとか。

そんな噂を聞いてはいたのだが、心のどこかで、自分はそんなところの世話にならないだろうというまったく根拠のない確信があった。

それが、どういう訳か、その世話にならないはずの場所の入り口に立っている。

空との境界が曖昧な真夜中の海に浮かぶ、客船を改造したそれは

——金魚鉢

——水槽

——アクアリウム

そんな風と呼ばれていた。道ならぬ悦楽を貪るための場に対してなんとも釣り合わない、長閑な名づけをするものだと思った。

もちろん、存在そのものが非公式だから滅多に港に停泊などしてない。大概は沖合に浮かんでいるだけだから、入り口まで来るのにも黒服のスタッフが操縦するテンドーボートに乗る必要があった。

ボートから直接船内へと渡り、テンドーゲートをくぐって狭い階段を上がれば、年季が入った外観からは想像もつかない綺羅びやか

な内装のエントランスに出る。

「いらっしやいませ。ようこそ無量寿楼船へ」

かつて客船として利用された頃にはフロントがあったと思しき場所に一人の女が立って、深々とお辞儀をしている。

そうだった。

ここの話をする者がどうして正式な名前を呼ばないのか。仰々しい名前が憶えにくい上に言いにくいからだ。

「初めてお遊びになられる方ですね。それでは、簡単ではございませんがご案内を務めさせていただきます」

愛想の良い笑顔を浮かべる女の口元と目元に細い皺ができる。この客船の外観と同じく、かつては華やかな容貌だったことは想像できるが墓が立っている印象は否めない。色白だが、艶を失いかけている肌は和紙のようだった。髪は特に飾り立てることもなく、後ろで束ねているだけで、服装も、真っ黒な着物に赤い帯をしめるだけの簡素なものだった。

案内されたエントランス中央は吹き抜けになっている。

そこに広がる光景を見て圧倒されてしまった。

そうか。

ここを一度でも訪れた者が、なぜ正式な名でここを呼ばないのか。それはこの光景がここのすべてを物語っているようにしか感じられないからだろう。

円筒形の吹き抜けスペースを埋めるのは巨大な水槽。

そしてその中には、真つ赤なプリーツスカートと純白のタイを翻しながら泳ぐたくさんの少女たち。

いや、厳密には水槽——ではない。

ガラスの中には、水の圧迫も重力の束縛も感じられない。不可思議な空間だった。

ガラスの向こうでの彼女たちの振舞いは、地上にいる時とまったく変わらない。ある者は本を読み、ある者は絵を描き、またある者は遊戯に興じて、おいかけっこなどしている。ただ、それら普通の振舞いが地面を離れた宙空でも行われているという一事が、ガラス内を異空間たらしめていた。

金魚鉢……。

真紅のセーラー服をまとい、ガラスの中で無邪気に遊んでいる少女たちを目の当たりにすると、思わずそう呟かずにはいられなかった。

「そのように呼んでくださるお客様が多ございますね」

案内役の女がニンマリと笑う。

「エントランスホールは三つのフロアを突き抜けるようにして設計されておりませす。水槽を隅々までご覧いただけるように周囲には螺旋状に階段が設置されておりませすので、お気に召しませす金魚が見つかるまで、どうぞごゆっくりお選びくださいませ」

内部の者が『水槽』や『金魚』と呼称するところを見ると、あれらの呼び名も勝手なものではないらしい。

今いる場所はちょうど、水槽の真ん中あたりだった。よくよく中を覗いてみると、確かに、地階近くの集団と真ん中、あと、さらに

上のフロア付近を漂う集団との間に少々間隔があいている。

「金魚たちにも序列がございまして、煩雑ながらご紹介いたしますと——」

水槽に絡みつく水草のような螺旋階段を下りながら女の説明を受ける。

水槽の一番下層を眺められる位置にきた。

「まず大きな序列で三つに分けられます。ご覧いただいている下層の金魚を『和金』と総称いたします。その和金の中でもさらに三つの順位がございまして、

見習いから上がったばかりの『和金』、

その次が『地金』、

さらに上が『朱文金』

となつてございます」

見れば、幼い顔立ちの者が多く、全体の数も多い。

「なにぶん、見習いから上がって間もない金魚ばかりでございます。あつてはならぬことですが、お客様に粗相をしでかすこともないとは言ひ切れませせん。ですので、お代がもつとも低く設定されている階層でございます。しかしながら、幼い金魚を磨き上げることがを好まれる通なお客様もいらつしやいます」

女が笑いかけるので、こちらも微笑み返そうとするが、どこか表情が引き攣つてしまつたように思う。

「初心な反応を喜ばれるお客様も決して少なくはございませせん。よろしければ、ここで吟味していただいても結構でございますよ」

ごくり、と我知らず生唾をのんでしまつた。

「失礼。急かすものではございませんでしたね。お客様のご意向も伺わずに申し訳ございません。では大きな序列の二つ目をご紹介します」

入り口のあつた二階フロアに戻ってきた。

「こちらが『琉金』と総称される序列の二でございます。その中でさらに順位が細かく別れまして、下から、

『琉金』

『桜東』

『竜眼』

『羽衣』

『紅白竜』

『東錦』

『丹頂』

『蝶尾』

『土佐金』

の合計九つの順位から成っております」

下の和金でも充分人数が多いと思つたが、ここはさらに順位の多さも相まってかなりの数の少女がひしめいていた。見た目も和金よりバリエーション豊かだ。和金の頃の幼さを残している者もいれば、確かな成長を感じさせる者もいる。いずれも可憐な少女ばかりである。

「竜眼より上ともなれば、安心してお客様にオススメできる金魚ばかりでございます。この序列ともなれば、充分、お客様に『選ぶ』楽しみを味わっていただけのものと存じます」

少女の中の一人がこちらを見て、微笑みかけてきた。

なるほど、相応の媚態を身につけている。だが、そこに嫌みがないところが可愛らしくも恐ろしい。

「では、最後の序列をご紹介します」

水槽の一番上層へと階段を上がる。

ここで一気に水槽内の少女の数が減る。

しかし、ここで気付かされる。琉金までで感じたのは数による圧倒だったのだ、と。ここは違う。一人ひとりが醸し出す雰囲気は段違いに濃密だった。

「こちらが無量寿楼船の自信をもつてご紹介できる序列の一位、『蘭鑄』でございます」

耳は女の言葉を辛うじて聞いているが、最早、目は彼女たちに釘付けとなっていた。

「蘭鑄の中にも順位がございまして、下から、

『頂点花房』

『水泡眼』

『丹水』

『京錦』

そして、すべての金魚の頂点に位置するのが『七宝』でございます。名前の通り、『金』『銀』『瑠璃』『玻璃』『碑礫』『珊瑚』『瑪瑙』の名を冠する七名だけが選出される最上級の金魚でございます。残念ながら、厳選に厳選を重ねるものですので、現在、七宝は四つが欠番となっております。ともすれば、ご覧いただいている蘭鑄たちの中から未来の七宝が出てくるやもしれません」

蘭鑄の少女たちが微笑みかけてくる。

あれほど美しい存在が、意志をもって、こちらに働きかけてくる
ことが俄に信じられなかった。

愛らしさ、美しさ、凛々しさ、母性、そんな数ある女性の魅力と
いう観念を形にしたものなぞ、彫刻や絵画のような芸術品か、それ
こそイメージの世界にしか存在しえないのだと、そのことに疑問を
差し挟む余地さえないと思っていたのに。それが肉体を持ち、意志
を持ち、こんな金魚鉢の中に収まっている。ましてやそれを限られ
た時間内とはいえ、この手にすることが許されるというのが、現実
感を薄れさせた。

……？

ふと見ると、紅い少女たちの中に、僅かながら白が混じっている
のに気づいた。純白のセーラー服に、タイだけが紅い。さらに見れ
ばそれらの少女は皆アルビノらしい。

「ああ、あの白い金魚でございますか。あれは特殊な枠でございま
して……。ここ、無量寿楼船には様々な方がいらつしやいます。ヒ
トもヒト以外の方々も。そうすると、中にはお相手を務めるために
特別な技能や性質などが必要になる方もいらつしやいます。あれは
そうした技能持ち、性質持ちでございます。欄外とでも申ししまし
うか、生まれ持った要素も関係しますので単純な順位付けが難しい
のですが、各階層にあのような欄外が設けられております。蘭鑄の
ものが『秋錦』、琉金のものが『江戸茜』、和金のものが『獅子頭』
でございます。」

ヒト以外……。

この金魚鉢に関する噂があらゆる所——それこそ人の世からずれ
た世間からも聞こえてくる事が一層、この不可解さを増大させて
いた。

いや、しかし。

あらゆる所で評判が広まっているからこそ、噂を聞きつけ、ここ
を訪れることができたのだが……。

「もちろん、どなたでも白服をお楽しみいただけますので、遠慮な
くおつしゃってください」

まさかここまで選択肢が多いとは思っていなかった。

正直なところ戸惑ってしまうが、このエントランスに足を踏み入
れてから、ほとんど水槽から目を離せないでいた。

選ぶ楽しみか。

知らない内に、顔が綻んでいないか少し気になった。

二、デメキン

へクマザサ ハチイリ オトナイサンピン

インカムから聞こえるのは、テンドーボートを操縦する仲間からの報告。

へ本日六十件目のオトナイサンだ。全員、バイザー起動。実体を把握次第、追って指示を出す。ゲート班は警戒態勢を解くな

インカムからはさらに教官の声が聞こえてくる。

エントランスフロアのスタッフスペースで待機していた淡竹^{はちく}は肩からぶら下げていたP50のグリップを握り直す。

スタッフスペースは外から来た者に対して明確に場所が示されていない。ここ無量寿楼船には、スタッフオンリーの標識がないのだ。なぜならば立ち入りを禁止するまでもなく、スタッフの利用する出入口は徹底的にカモフラージュされており、部外者の迷いこむ余地が一切ないからだ。

現在、淡竹が待機しているスペースは、エントランス二階にあるラウンジの壁の裏だ。

最低限の照明しかない薄暗い廊下に、バイザーの放つ蛍光が合計六つ、壁沿いに二列に並び、淡竹と同じく待機している。

灰色の廊下と、辺りに充満する薄闇に溶けこみそうな漆黒のセーラー服で彼女たちは有事に備える。

ここ無量寿楼船の主役たる真紅のセーラー服に身を包んだ少女金魚たちは、その身に影を纏う彼女たちが支えている。

デメキンと呼ばれるスタッフ兼自警団だ。

その名は、夜の船を縦横無尽に駆けるための暗視ゴーグルを兼ねたバイザーと制服の色に由来する。

無量寿楼船は、その業務内容から設備の隅々に至るまでが法に背くものであるということは言うまでもない。実際、デメキンにはメインウェポンとしてP50、ハンドガンにはグロック、あと近接戦闘用に各種ナイフが支給されている。客船一艘分に詰め込まれた途方も無いサイズの無法である。

そんな無法を守る法はない。であれば、自らが内も外も律するしかない。さもなくば自ずから立つことなど叶わない。

彼女らデメキンは無量寿楼船の「律」を司っている。

行儀の悪い来訪者への対応、赤服または白服の少女たちの身の回りの世話、船内清掃、物資調達、各種訓練、その他諸々。彼女たちの仕事は多岐にわたる。

「今日のオトナイサンはヒトが多いね。今から来るのはどうかなあ。ねえねえ、淡竹、どっちか賭けない？ あたしはまたヒトだと思うね。外れたら甲板磨きの掃除当番、代るよ」

隣でP50のマガジンから弾丸を出し入れさせて手を遊ばせている三葉^{みづは}が話しかけて来た。

「じゃあ、私はヒトじゃない方」

「あれ？ 淡竹、意外にノリいいじゃん」

「まあ、あんまりイイコトとは思わないけど、三葉が賭けに誘ってきたらとりあえずノっておいて間違いないってみんな言うからな」

「きー、そうやって欲を出すヤツほど負けるんだよ！」

「あつおいつ、三葉、インカムがオンになつてるぞ」

「うそっ!? きよ、きよきよきよかん! 申し訳ありません——つて、さつき通信切つたばっかじゃん! ツマンナイ引つ掛けすんなよな!」

他の仲間が呆れたように含み笑いをした。

オトナイサンとは、つまり無量寿楼船に来る客のことだが、船内ではオトナイサンと呼ぶ習わしになっている。「訪う」おとな主体だから、オトナイサン。訪れる者のほとんどがオトコであり、富を落としていくという意味も込められているらしい。客という言葉では、ヒトとしての客という意味が自然とこもってしまうため、それを避けるためというのもあるが、オトコ全般をオトナイサンと呼ぶ傾向もある。

なぜならば、無量寿楼船の乗組員には男が一人も存在しないため、男そのものが『外』の象徴だからだ。

「今日はヒトの団体さんが入ったらしいからヒトが多かつたつてだけだよ。これからくるオトナイサンは単独でしょ? ならそろそろヒト以外が来てもおかしくないって。うん、淡竹、勝てる勝てる」
先頭の蓬よもぎがニヤニヤしながら振り返った。

「良い事聞いた。じゃあ、甲板掃除よろしくな。三葉」

「ふんっだ。賭け事の神様は、順番なんて言葉を知らないからあたしたちを楽しませてくださるんだよ! おつまえら分かつてなさすぎ」

三葉が音を出さないようにしながら地団駄を踏んだ。

へエントランス各班、オトナイサンが受付通過しました。透視によ

り、監視してください」

オペレーターからの通信が入ると、おどけていた三葉も即座にマガジンを装填した。

全員がバイザーのモードを暗視から透視に変える。壁も床も消えて視界が一変した。特別製のバイザーは生体だけをとらえ、無機物を無視できるのだ。

「初めて来るオトナイサンだね」

「ははは、水槽見て、ソワソワしてるよ」

「あ、今、私の檸檬れもんに見惚れてた」

「檸檬だけじゃないって。初めて水槽見たら、大体みんなあんなるって。で、ちゃんと一人ひとり見るようになれば、あたしの梔子くちまに心奪われるんだよ。そういう風に決まってるんだよ」

慣習として——。

黒服の娘は、赤服の娘がオトナイサンの相手ができるようにすると専属の世話係としてペアを組まされる。

そうして食事や入浴の世話をする内、多くの黒服が対象となる赤服に多大な思い入れを抱くようになる。姉妹のようでもあり、恋人のようでもあり、時には母娘のような関係を築くペアも出てくる。

無量寿楼船の女たちにとって、男はあくまで外から訪れる者ではない。用が済めば出ていく存在。訪れるだけのオトナイサンなのである。そのため彼女たちのステータスに影響を与えるような価値を男は持ち得ない。男が女のステータスになるということがないのである。

徹頭徹尾、『遊び』の相手でしかないのだ。

とはいえ、遊びといっても遊興としての意味合いだけではない。ヒト以外も受け入れる娯館だからこそ、巫女さながらに、神を楽しませ、奮い立たせる『神遊び』の技芸も要求されるのだ。

そのような相手である男に畏敬の念を抱くことはあっても、恋情など湧きはしない。

女しかない極めて特殊な環境である無量寿楼船だからこそ育むことのできる価値観がそこにはあった。

今も、オトナイサンがどの娘を選ぶかで張り合ったりするデメキンたちにとつて、赤服の娘たちは自分にとつて可愛い可愛い恋人であり姉であり妹であり親友であり娘であり母でもあるが、男に対しては、当たるか当たらないかの福引ていどの認識しか持っていない。

〈総員、破視の結果を転送する。甲板に近い班は船体の右舷・左舷に網を張っておけ〉

インカムから再び、教官の声が流れてくる。

破視とはバイザーの有する機能だ。ヒトならざる者の変化を見破るモードである。この機能によつて、あらゆる意味でオトナイサンは裸である事を強制されてしまうのだ。

転送されてきたデータを確認すると、淡竹が三葉の肩を優しく叩いた。

「改めて、甲板、よろしく」

「ぎぎぎぎぎ」

〈淡竹、応答しろ〉

「はい、こちら淡竹です、教官」

突然インカムからデメキンを統率する教官からの声がかかり、三

葉がしゃっくりみたいな音をたてて息を呑んだので、またみんなが含み笑いをした。

〈オトナイサンは、水蜜桃を選んだ。エントランスより離脱して、客室に回れ。代わりにゲート班、齋、エントランスへ〉

「了解」

水蜜桃とは、淡竹のペアである。

通信が終わつたのを確認して、三葉が擦り寄ってきた。

「今日は淡竹がイイところ全部持っていきやがんの。くーやーしいい。しかも最近、みっちゃん忙しそうじゃん」

「そうだな。少し頑張りすぎてるかもしれない。水蜜桃、大丈夫かな」

「ひやー。王子様は余裕ですコト。いいよ。淡竹は今回これだけイイ思いしたんだ。次はあたしが勝つに決まってますよーだ」

「賭け事の神様は順番つて言葉を知らないんじゃないよ」

「う、うっさい。それでも賭け事好きには恩情があるんだよ！」

蓬たちが歯ぎしりする三葉の頬をつついて冷やかしていた。

淡竹はバイザーを透視から暗視にモードを切り替え、廊下を走りだした。

向かう先は五階の客室だ。

（水蜜桃、また変化のオトナイサンが相手だ。無理してなきやいいけど……）

今朝の水蜜桃の様子を思い出しながら、淡竹は薄暗い階段を駆け上がった。

三、淡竹

無量寿楼船の時間はシンプルだ。

起きて支度を終えるまでが朝。眠りに就くのが夜。それ以外の時間はすべて昼。太陽の動きはあまり関係ない。

今の私の時間は昼。朝食、洗濯、掃除、訓練、昼食をすでに済ませて来ている。手にはクリーニングしたての真っ赤なセーラー服。でも水蜜桃はまだ夜。これから私が朝にする。水蜜桃は朝がとても弱いから、起こすために色々としなければならぬことがある。

琉金以上は個室が与えられている。階段を駆け上がり水蜜桃の部屋へ向かいながらスカートを持ち上げてくりあげる。腕まくりをして、準備完了。

ノックは要らない。そつとドアを開け、音をたてずに部屋の中へ。閉める時も無音がける。新しいセーラー服は抽斗の上に。

水蜜桃はあまり部屋を飾り立てない。簡素な構成で必要な家具だけが配置されている。こういうところは親近感を覚える。

ベッドには、行儀のいい寝姿でシーツに包まれている水蜜桃がいる。

「モモ、朝だよ」

ベッドに腰掛けながら声をかける。

目元がピクリと反応を見せる。

「モモ」

頬に手を添えながらも一度声をかけると、水蜜桃の口元がふにふにと緩みだした。

くせつ毛なミディアムボブの髪をすくうように頬を撫でてあげると、くすくすしたそうに首をすくめながらも、私の手のひらに頬ずりをしてくる。

「ん〜、ちーちゃん……」

まだ目は開いてない。けれど、水蜜桃はわかつている。世話係だからといえばそうだけれど、彼女が一日の最初に触れるのは私だし、一日の最初に耳にするのは私の声なのだ。水蜜桃の中でそれは決まっていることだ。

「ほら、モモ、起きて」

「ん〜」

モモは目を閉じたまま身を振ってそつぽを向いてしまう。これも定まった手順。いわば起きるための儀式なのだ。

「ほら、モモ」

私も手順に沿って次のアクションに移る。

撫でていた手で水蜜桃の頭をつかんで逃げられないようにする。そうしてから、軽く、水蜜桃の頬にキスをする。

「……………」

目元も緩んできた水蜜桃がクスクスと含み笑いをこぼし始めたので、とりあえず起きることは確認できた。

「さあ、シャワーを浴びてちゃんと起きよう」

「んい〜」

物欲しそうに両腕をいっぱい開いて鳴き声をあげるの、私は

その腕の間に入り込む。

すると満足気に腕をたたんで、私の首にがっしりと抱きついてきた。私は水蜜桃の背中と膝の裏に腕をもぐらせて一気に抱え上げる。

顔も身体も洗ってすつきりさせてしまわないと朝ご飯を食べさせられないので、そのまま浴室まで運んでしまう。

脱衣所まで運ぶと、やっと立ってくれたけど、まだ、水蜜桃は首にぶら下がっているような状態だ。終始こんな調子なので、口うるさく言って水蜜桃を動かすよりも、こっちで手早く処理した方が断然早い。

抱きつかせたまま、パンツを脱がせて、浴室の椅子に座らせる。

やっと首から離れたので、この間に寝間着のベビードールを脱がせて、シャワー開始。ここまで密着されっぱなしなので、部屋に入る前にスカートを上げておかないと、こちらがスムーズに動けないのだ。

「まだもう少し目をつむっていいよな」

人肌より少し温かいぐらいの温度でシャワーを勢いよく頭からかけてやる。

途中、シャワーの湯をコップに溜めて、はい、と一声かけると目をつむったまま水蜜桃はコップを受け取り、口を濯ぐ。

目覚ましのためのシャワーなのでさっさと切り上げて、再び脱衣所に水蜜桃を運んで、急いで身体を拭いてやる。シャワーで温まった身体が冷えないように手早く。

ここでやっと水蜜桃の目が開く。

「はい、おはよう、モモ」

「えへ、おはよ、ちーちゃん」

そばかすのある頬を緩ませて屈託なく笑う。

水蜜桃だから、モモ。

淡竹だから、ちーちゃん。

ペアを組んでから、いつの間にかそう呼び合うようになっていた。きつかけは、特になかったと思う。お互い、これ以外の呼び方が思いつかなかった。

私の胸あたりまでしか背丈のない水蜜桃だが、拭くべき面積は決して小さくない。くせつ毛だからたくさん水を含むので、できるだけ吸い取っておかないといけないし、何より胸が、その、とても、豊かだ。

毎日のことだけど、毎日圧倒されている。Eカップだそうだ。小さくて、ぬいぐるみみたいに可愛らしい女の子なのに、水蜜桃は胸だけが大人びているようで、正直戸惑うところがない訳じゃない。

しゃがんで、片方ずつ、胸を持ち上げて、普段隠れている部分を拭いていると水蜜桃は満面の笑みで身体をくねらせた。

「ちーちゃん、くすぐりたい」

「我慢して。毎日のことだろ」

むーむー唸って逃げようとするので、腰をがっしりとかかえて固定してやる。

「やあー、ちーちゃん、なんかそれやらしい」

と言いつつも、背中を丸めて、水蜜桃が私の頭をかかえこんできた。

「こら、モモ、身体が拭けないだろ」

「えー、拭いてくれるよー。お尻とかー背中とかー」

この体勢だとそこくらいしか拭けないのだからしょうがない。

いや、それよりも、大きな胸に挟まれて息苦しい。遠慮無く抱きついてくるので、すごい圧迫感だ。

「こういう時、おっぱいって邪魔だねー」

「何を言ひ出すんだよ」

「だってー、ちーちゃんにくつつこうとしてるのに、間にクツション挟んでるみたいなんだもん。ちゃんとかつつけない」

「こんな無理な体勢でくつつこうとするからだろ」

「あ、でも、そうやっておっぱいの間でちーちゃんがしゃべってくるとムズムズ気持ちいい」

「バカ。ほら、ちゃんと立って」

「はい」

きゅつと胸を張って、身体の前側を拭くように示してくる。

「あ、ほらほら、おっぱいの間、まだ濡れてるから、ちーちゃん」
「だから言ってるだろ」

最後の箇所を拭いていると、両側から押して、胸の間に私の腕を挟み込んだ。

「えへー。えへへー」

「もういいって、モモ。ほら、早く朝ご飯済ませよう」

「はい」

ベッドに戻って、枕元の抽斗から下着を出す。

「ほら、左足あげて」

私の肩につかまらせて穿かせてあげる。

ブラジャーもつけてあげる。水蜜桃は前から腕を回してつけて欲しいとせがむけれど、私は自分のブラのホックでも苦戦してしまう時があるくらいなので、人につけてあげるに際して、そんな器用なことはできない。

黒のハイソックスを履かせて、最後にワンピースタイプのセーラー服を着せる。

タイを結んで、髪を梳いてあげれば一応の身支度は完了。

これでやつと、朝ご飯に移行できる。

やつと。やつとだ。

枕元にある抽斗の反対側には伝声器があるので、ボタンを押してダイニングルームに繋ぐ。

「水蜜桃まで、朝食をお願い」

〈了解〉

応答する声からすると今日の配膳係は、薺らしい。

「ちーちゃん」

通信が終わるか終わらないかのタイミングで水蜜桃が横から私の腰に飛びついてきた。

「ああ、もう、もうすぐ朝ご飯が運ばれてくるからベッドに座って」

「うー、やっぱ押し倒せないなあ」

水蜜桃としては、私をベッドに押し倒したらしい。小さい足を踏ん張って、ぐいぐいと押しきてきているのだが、その目論みが成功したことはない。体格差があるし、何よりこちらはそれなりに訓練

を積んでいる。船上での戦闘は、特に時化^{しげ}を想定した場合、足腰と平衡感覚を鍛えておかないと話にならないのだ。だから、これからも水蜜桃のこの突進は成功することはないだろう。

ないだろうけれども。

これに必要な手順だったりするのだ。

私はおもむろに水蜜桃と共にベッドへと倒れこむ。

この時ばかりは、水蜜桃は素早い動きを見せる。

私のお腹に馬乗りになって、そのまましなだれかかってくる。

「もー、ちーちゃん、分かっててそういうこと言うんだもん。一日の最初は朝ご飯じゃないの」

さつきまでの動きとは全く異質な動きで、身体を擦り合わせてくる。

(やっぱり、モモは赤服なんだなあ)

こういう時、つくづく感じるのだ。

一方的に甘えてくるように見えて、相手を確実に刺激するように触れてくる。

それでも、オトナイサンにする時の動きと今の動きとは、また違うのだろう。

今はマッサージを受けているような感覚だった。ゆったりと訓練後の身体がほぐされていくような、柔らかな接触。

これも、毎日のこと。

だから、力を抜いて、水蜜桃に身体を委ねてしまう。

「一日の最初に口にするのは、ちーちゃんじゃなきゃ——ダメ」
水蜜桃の両手で頬を挟まれる。

それから、ゆっくり、覆いかぶさるように、水蜜桃が唇を重ねてきた。

そっと口付けをした後は、ついでむようにしながら私の下唇と上唇をなぞっていく。それが終わると今度はぴちゃぴちゃと音をたてて舐めてくる。

水蜜桃は、指も唇も舌も、どこもかしこも、柔らかい子だと思う。その柔らかさを相手にまで強いる、浸食してくるような柔らかさだ。

この行為は、水蜜桃曰く、能動的にしなければならないのだという。

シャワーや着替えのように私からするのでは意味がなく、水蜜桃から『撮取』することに意味があるのだそう。

実のところ、この間、私はどう振る舞えばいいのか、困ってしまう。毎日のことなのに。

そういえば、初めてされた時はどうだったろうか。同じように困っていたように思うけれど、パニックも起こさなかったはずだ。どうも、これについて私の思いは停滞してしまっている。過去も現在も未来も。この行為はこのままな気がしてならない。

私の気持ちはひどく中途半端なのだが、それとは違う所で確実に反応が出てしまう。

それも毎日のこと。

——吐息が、漏れてしまうのだ。

「……………は……………」

うすく開いた口を水蜜桃は逃さない。すかさず舌を挿しこんでくる。

軽く、お互いの歯が触れる音が頭に直接響いたので、水蜜桃は口の端を少し持ち上げて笑った。

歯茎や上顎まで、バカ丁寧に水蜜桃は舐めてくるので、この時が一番、反応に困る。

最後に舌を絡ませ合うと、自分からなのに、名残惜しそうに水蜜桃は口を離す。

「ふうん……」

うつとりとした表情で、私の首に顔を押しつけてくる。

「ああ、もう、ちーちゃん素敵」

吐息混じりに言うので、首から肩にゾワゾワとした感触が走る。

「私からは何もしてないよ」

「ううん。したいようにさせてくれてるよ」

耳を噛まれた。

また、ゾワゾワする。

「あーあ、私のおっぱいとちーちゃんのおっぱいが逆ならよかったのに」

耳元にいたかと思えば、今度は私の胸にぐりぐりと額を押しつけている。

「モモみたいに大きかったら邪魔にしかならないと思う」

「んもー、そんなひどいこと言わないでっ。絶対素敵だよ」

私は胸のサイズを気にしたことはない。胸の大きい仲間が何かと窮屈そうにしている様子を見ていたので、自分は丁度よいサイズで良かったと思ったくらいだ。大きいと何がよいのだろう。

「ちーちゃんはとっても素敵な王子様だけど、おっぱいが大きかったら、王子様でしかもお母さんになっちゃうんだもん。無敵だよ」

「胸の小さいお母さんだっているよ」

「そうだけど！ そうなんだけどー！」

むくれながら上目遣いで睨んでくる水蜜桃の頭を撫でてなだめる。

「モモは、ふくふくしててとっても可愛いよ。抱きしめても抱きしめられても、気持ちいい」

ぼっと水蜜桃の顔が赤くなって、急に目を逸らして、もじもじしだした。

「か、可愛い？」

ちらちらと探るような目を向けてくる。

「うん。可愛いよ」

「でも、ふくふくしてて……あつ！ ひよつとして、重い？」

私の上からどうこうとするので、身体が離れる前に、水蜜桃の背に腕をまわして、抱き寄せた。

「こうして、モモをだっこすると気持ちいい。だから離れないで」

肩を竦ませて身を縮める水蜜桃の耳元で、しっかりと言葉が届くように言った。途端に水蜜桃から力が抜けて、私に身体を預けてくる。

「うー、うー、ちーちゃん好きい！」

水蜜桃は、コロコロと表情がよく変わる。拗ねたり、笑ったり、照れたり、忙しい。けれどそんな様子が微笑ましく思う。

「あーん、もう今日は一日中こうしていいよ！ それで、さつきみたいに耳元でずーっと『好き』って言うって欲しいよー!!」

「さつき、好き、なんて言ったっけ？」

「ええっ!! 好きじゃないの!？」

「い、いや、好きだけど」

「じゃあ、もつと甘く囁いてよー」

「はいはい! 朝食前からごちそうさま!!」

突然の第三者の声に、水蜜桃と二人で飛び上がった。

配膳係の齋だった。呆れ顔でドアの所になぜか仁王立ち。フチ無し
の眼鏡を指で押しあげる仕草がひどく冷淡なものに見える。

「齋、いつから？」

「まあ、おっぱいの小さいお母さんもいるってのには賛同するわ。

だからモモちゃんの朝食は没収しないであげましょう」

少なくとも、そのあたりの会話からは聴いていたのか。

水蜜桃の朝食を載せたカートをベッド横まで押してきて、テキパキと準備を始める。

「来てたならすぐ声をかけてくれればよかったのに」

「淡竹、あなた、淡白なフリして、その実、天然だっただけなのね。結構、真顔で甘ったるいセリフ言ってくれるじゃない。しかも現場を私に目撃されても慌てもしなげりや恥ずかしがりもしないなんて」

「天然……」

「まあまったくもう、やることやってるんだから、普段もうちよつと私たちにも話題提供しなさいよね。いかに自分がモモちゃんにデレ

デレなのか」

「デレデレって、大袈裟な言い方しなくても……」

「や、でも安心したわ。あんな淡白な淡竹じゃ、モモちゃんが寂しがってるんじゃないかって心配だったけど、全然そんなことなかったのね」

「ちよつと、齋……」

齋はトレイの上に朝食を並べ終わると今度は笑いだした。

「淡竹に可愛げがない分、モモちゃんに可愛げが集中してるのね。うんうん。何だかんだでバランスは取れてるのかな。いやあ、安心した安心した」

妙に穏やかな眼差しを向けられたので、面食らってしまった私は次の言葉が出てこなかった。

「邪魔してごめんね、モモちゃん。でももう私は消えますから気にせず、二人で、しっかり朝食楽しんでね」

「ありがとう、齋さん」

ちよつと頬を赤らめながら水蜜桃は明るく返事をした。

その時、水蜜桃の頭を撫でる齋の目が妖しく光った。

「そうそう、モモちゃん、ご飯っていつも淡竹に食べさせてもらってるの？」

「うん、抱っこしてもらいながら食べる時もあるよ」

ふふーん、と妙な声で齋は意地悪そうに笑った。

「へえーそう。そうなんだ。私なんか、杏あんずに口移しで食べさせてあげたことあるけど、モモちゃんはしてもらったことないのかなあ？」

杏とは、齋とペアを組んでいる赤服の竜眼の娘なのだが――あ、

水蜜桃の眼の色が変わった。

「な、ない！ ないない！！ 口移しなんてしてもらったことないよ！ いいな！ いいな！ どんな風に杏ちゃんに食べさせてあげたの!? 齋さん！」

水蜜桃が目を爛々とさせて身を乗り出している。なんだか不穏な気配を感じる。

「齋、モモを褒めるなよ」

「失礼な。お姫様たちに、より充実した日々を送ってもらうことが私が私たちデメキンの使命でしょうに。それを全うしただけのことよ」

齋は大仰な仕草で水蜜桃の前にひざまずき、手の甲にキスをした。

水蜜桃はくすぐったそうに笑っていた。

「それじゃあごゆっくり。あ、そうそう、ついでにモモちゃんの脱いだセーラー、持って行ってあげるよ」

「ああ、ありがとう」

赤いセーラー服は一人に対して数着の替えが用意されている。毎日着替えるため朝のこの時間に昨日着ていた服を回収するのだ。

「これで、淡竹はランドリーに寄る時間が省けたので、その分だけ長く、モモちゃんに朝ご飯を食べさせられる訳ね」

「齋さん、優しい！」

何のこれくらい、とにっこり笑って齋はさっさと出て行ってしまった。

さて。

水蜜桃の朝ご飯だ。

「んんんんんん」

見ると、水蜜桃は目を閉じ、口を突き出して、待ちの体勢だった。「……口移しは、今度にしよう」

「ああん！」

この後、駄々をこねる水蜜桃をなだめすかして、朝ご飯を食べさせるのは骨が折れた。

朝食後、膝枕で水蜜桃を休ませていると、また寝てしまいそうになつていた。会話の応答が曖昧だったので、おかしいなと思つていたのだが、疲れがとれていないのだろうか。

「モモ、今日、お鉢に入って大丈夫か」

お鉢に入るといふのはエントランスにあるガラスケースに入るといふこと。つまりお相手をつとめる意思表示をするということだ。

オトナイサンが満足するためには、金魚たちも万全の状態で見せびきたというのが、この常識である。そのために休養をとることは咎められるものではない。

実際、ここ最近の水蜜桃が選ばれる割合は高い。人気があるのは良いことだが、連日オトナイサンの相手をしていると、中には乱暴な手合も出てくるし、ヒト以外のオトナイサンであれば交わり方がヒトと違うために体力を相当削られることも珍しくない。

時には白服の娘たちが相手をして不思議ではないオトナイサンの相手をしたことだつてある。

「休んだ方がいいんじゃないのか」

「んん、大丈夫大丈夫。お鉢に入る時間までまだまだ余裕あるし」

「無理はだめだ」

少し心配になって水蜜桃の額に手を添える。

そうしたら、水蜜桃はやっぱり屈託なく笑って、

「えへへ、いっつもちーちゃんに元気もらってるもん。大丈夫だよ。

ほら、今も、触れてくれてる手からポカポカあつたかい元気もらってるよ」

事も無げに言うのだった。

「乱暴なオトナイサンが来たら、無理はさせないから。すぐ止めに
入る」

「だあいじょうぶだよ。ちーちゃんに心配してもらうのは嬉しいけど」

最後に水蜜桃は私のお腹にぎゅつと顔をうずめて、それから振り切るようにすつくと立った。

私はまだ少し気にかかるけど、出ると言う以上は仕方ない。

化粧台に置かれているヘアピンをつけてあげる。

赤服の娘たちがつける髪飾りはそのまま、順位を表している。

水蜜桃がつけるのは『羽衣』のヘアピン。その名のとおり、大きくなびく尾鰭の意匠が施されたヘアピンだ。

このヘアピンをつけて部屋を出れば、水蜜桃の朝は終わり、昼に移行する。

「今日は、どうする？」

「^{すみれ}菫姉さんの部屋に行ってくる」

菫さんは、蝶尾に位置する人だ。姉さんというのは血のつながりによるものではなく、赤服としての指導係をそう呼ぶ。中には実の

姉で指導係というケースもあるけれど、赤服としての立ち居振る舞い、オトナイサンの悦ばせ方、その他いろいろ無量寿楼船で過ごすに必要な知識と技能を見習いの頃から、ずっと水蜜桃に仕込んできた人だ。

菫さんなら、疲れを解消する薬や療法を知っているかもしれない。

「じゃあ、そこまで送るよ」

水蜜桃と手をつないで歩き始める。確かに、薺がランドリーへ寄る用事を肩代わりしてくれた分、いつもより水蜜桃との時間を多くとれる。

「やった！」

嬉しそうに水蜜桃は私の腕に飛びついてきた。

※※※

それが今朝のこと。

教官から転送されたデータによって、今回のオトナイサンもヒト以外であることが確定した。

水蜜桃とオトナイサンの間に割って入るような事態にならないように祈りながら、客室フロアへ入る。

後半へ。